慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『嘔吐』の成立とその意義
Sub Title	Genèse et signification de la "Nausée"
Author	白井, 浩司(Shirai, Koji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.164(183)- 173(174)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『嘔吐』の成立とその意義

白　井　浩　司

ジャン=ポール・サルトルの最初の長篇小説『嘔吐』La Nausée は，1938年5月ガリマール書店から刊行された。この哲学的思弁に満ちた小説がどのような意図のもとに構想され，発表されるに至ったかについて，いま私たちはシモーヌ・ド・ボーヴォワールの回想録『働きざかり』La Force de l' Age という洵におあつらえむきの貴重な文献を持っている。パリの高等師範学校において識りあいになったふたりは，はじめ，いわゆる契約結婚をするのであるが，サルトルの仕事のよき助言者であったボーヴォワールは，サルトルの著作がいかなる進展をみせたかを重点的に記しているのである。もちろんこの回想録は，1929年から第二次大戦の勃発，戦時中の抵抗運動を経て，パリが解放された1944年の夏までの期間を扱い，無名の青年たちがさまざまな困難を乗り越えて転換期を生きて行くその姿を記録しているのであって，特にサルトルにのみ焦点が合わされているわけではなく，サルトルの思想的文学的成長を詳細に跡ずけるには，彼自身執筆中といわれる自叙伝の完成を待たなければならないが，それでも，この書物の中心人物はサルトルであり，ボーヴォワールの愛情に裏づけられた颯爽たる青年サルトルの面目が躍如としている。ボーヴォワールの記述は，必ずしも時計の針の動きの如くに時間を進行させてはいず，たえず後もどりしたり，先きに進みすぎたりするので，サルトルの『嘔吐』に関しても，私たちは方々の個処から必要な知識をひろいあげねばならないのである。したがって正確な日づけというようなことは，さらに将来の課題となろう。

さてサルトルは，1923年18歳のときに，「標題なき雑誌」Revue sans titre と題される同人雑誌に，『病的なる天使』L'Ange du Morbide というコントを発表している。私たちが知る限り，これは彼の小説中はじめて活字になったものである。ひとりの教授

（フランスでは Lycée 以上の教師を教授と呼ぶ）が療養所で回復期を過しているが，そこである女性と識りあい，ふたりは恋愛する。といっても，これは崇高な恋愛というよりか，その教授にとって，欲望充足のためのものであったらしく，ある日草原でふたりが接吻したとき，女が喀血すると，彼は女をふり棄てて宿舎に帰り，身体を消毒して帰郷してしまうという筋である。サルトルの小説には，通常人が嫌悪する肉体的生理的に醜悪なものを殊更強調して描くという傾向があり，それを多くの人（たとえばガエタン・ピコン）は，形而上的自然主義と名づけたが，すでにその片鱗がこのコントに見られる。もうひとつ，この卑怯な教授は，のちに中篇『一指導者の幼年時代』の主人公リュシアンに成長するのだが，サルトルにとって克服されねばならない人間像として提示されていることはあきらかである。このリュシアンは，さらに，『自由への道』 Les Chemins de la Liberté の主人公マチウの兄ジャックに転身するが，このときは，ボーヴォワールのいとこだったジャックの面影が彼のうちに二重写しになっているように考えられる。いずれにしてもサルトルは，否定されるべき消極的人物をこのような形で描きこんでおく。『嘔吐』におけるロジェ医師その他がそうであるように。したがって，『病的なる天使』の主人公がサルトルの分身だと考えるのは誤解であろうし，その意味で，サルトルの鋭い倫理性をうかがうことができるかと思う。

『病的なる天使』のつぎに活字になったのは，リブモンデセーニュの主寄する「ビフュール」Bifur 誌（1931年6月8日）に載った『真理の伝説』 La Légende de la Vérité である。当時サルトルは，高等師範学校を卒業し兵役の義務年限を無事終了してから，ル・アーヴルの Lycée の哲学教授に任命された。彼は，長篇『真理の伝説』を書きあげ，彼より一足さきに文名の挙っていた莫逆の友ポール・ニザンの推挽によって，この原稿をヨーロッパ書店に持ちこんだのであったが，ひとまず断章を「ビフュール」誌に掲載したわけである。しかしこの長篇の刊行は，同年の10月に拒否された。私はまだこれを読む機会にめぐまれていないのでなんともいえないが，ボーヴォワールは前記の書物のなかでこんな風に記している。「彼は考え直すと，この長篇がそれほどよくないことに気がついた。生きた思想を表明することには成功しているが，un style faussment classique et guindé（まちがった古典的文体，固苦しく気どった文体）が，文章を凍らせた」と。それでサルトルは，『人間存在の無意味性に関する公開状』 Le factum sur la contingence を書こうと考えた。これならばうまく行くという確信を彼は持っていたが，第一稿を見せられたボーヴォワールは，多くのダメをだした。たとえば，主人公ロ

カンタンの発見に小説的次元を与えること，ふたりが愛読していた推理小説のサスペンスを導入することなどを示唆した。彼女は，サルトルの意図はわかっていたが，つねに読者の立場に立って彼の原稿を批評し，特に形容詞と比較級の乱用を非難した。サルトルはいちいち彼女の忠告をうけいれ，長い間手さぐりで行なっていたその試みを完成に導いた。この『公開状』が主人公の名前からいっても，そのテーマからいっても，『嘔吐』の原型であったことがわかる。サルトルはこの小説の完成した形である『嘔吐』を，カストール（ボーヴォワールの渾名）に捧げているが，ふたりの愛情ばかりでなく，その協力ぶりからいってこれはたいへん自然なことであった。

この『公開状』ははじめ『憂愁』Melancholia と題され，サルトルの教え子だったジャックローラン・ボスト（現在「現代」Les Temps Modernes 誌の編集委員になっている）の兄ピエール・ボストの手を経て，ガリマール社に持ちこまれた。ボーヴォワールによると，この Melancholia という題名は，サルトルがデュラーの木版画が好きだったのでつけられたそうであるが，ガリマールは，『嘔吐』にしたらどうかと勧め，最終的にはこれに決定した。ボーヴォワールは最初反対したが，のちに賛成した。ただし読者がサルトルを自然主義作家と取違えはしまいか，それを心配した。

ガリマール社では，ジャン・ポーランと，ブリス・パランのふたりがこの小説を最初読んだ。ポーランは，形而上的真理と感情を文学的形式のもとに表明していることに不賛成だったが，パランの方が強く支持をしたらしい。後年サルトルは，ブリス・パランの言語論について好意的評論を書いている。

『嘔吐』の前身というべき『真理の伝説』の文体が古風で気どったものであることを作者自身が反省した，と前に書いたが，この文体からの脱皮に大きな影響を及ぼしたのが，ルイ=フェルジナン・セリーヌである。『嘔吐』の銘句にはセリーヌの戯曲『教会』L'Eglise からの引用があるが，1932年にふたりが読んだ小説中，セリーヌの『夜の果てへの旅』Le Voyage au bout de la nuit が最高の傑作だ，というのが共通の意見であった。ボーヴォワールは書いている。

「セリーヌは新しい道具を作りあげた。話しことば la parole と同じように生きている書き方 une écriture を。ジード，アラン，ヴァレリーの大理石のようにひややかな文章のあとだから，なんと緊張がとけたことか！　サルトルはそのまねをした。彼は，『真理の伝説』のなかでまだ用いていた堅苦しく取りすましたことば le langage gourmé を決定的に棄てた。」

つまりサルトルは，ジード，アラン，ヴァレリーの文章を手本にしていたが，セリーヌの出現によってその考えを変えたということである。セリーヌは，俗語，卑語をふんだんに用いて小説を書いた。この『夜の果てへの旅』の文学史的意義は近年ますます高く評価されつつあるが，ガリマール社のラ・プレイヤード百科全書中に収められたフランス文学史中，二十世紀の項目を書いているガエタン・ピコンの見解を一つの代表的意見としてつぎに紹介しよう。

「『夜の果てへの旅』は，その黒き光りの放射と，猛々しい叫びをもって現代の絶望を支配している。しかし，気の遠くなるようなこの驚くべき書物は，傷ついたひとりの人間のわめき声であるだけではない。文学の発展において，これは重要な道しるべなのである。なぜなら，この小説は，伝統的方法を内面的衝撃に従属させ，さまざまな虚構という贅沢さの代りに，自己の完璧な表現という真理を持ちこんだからだ。なお，この自己表現というものには，作家は書きながらしか近づきえないのである。なぜなら，物語の展開とか，情景や人物の提出の仕方が，すべて，この小説では，たえざる創造の如き言語によって写されているからだ。語調のはげしさ，力強さ，新しいことばの創造など，なんとすばらしいことか。さらに俗語の援用によって，話しことばによる文学の更新の可能性を示す，決定的な模範である。」

一言でいえば口語を，話しことばをもってこの小説を書いたということであり，それがサルトルに大きな魅力となって映ったことはたしかである。

文体ばかりでなく，その世界観においてもサルトルは，セリーヌに多くの示唆をうけたようである。「セリーヌの無政府的傾向は，私たちの考えにたいへん近いように思われた。セリーヌは，私たちを狂喜させた文体と調子で，戦争，植民主義，凡庸性，お座なりの文句，社会などを攻撃した」とボーヴォワールは書いている。アンリ・クルアールやジェルメーヌ・ブレーなども，『嘔吐』がセリーヌの小説の系譜につながるものであることを認めている。しかしセリーヌの方は，反ユダヤ主義者，反左翼主義者として，のちに，サルトルに悪罵を浴せることになるのである。(『井のなかの蛙』 L'agité de bocal 1948年参照)。

文体とテーマに関するセリーヌの影響のほかに，ふたつの興味ある逸話をボーヴォワールは語っている。ひとつは，彼らの同窓のレーモン・アロンに関したことである。アロンは，ベルリンのフランス学院に奉職し，ベルリンの大学に留学していたが，一時パリに帰ったとき三人で会食した。そのときアロンがサルトルにむかって，「いいかね，

もし君が現象学者になろうとしているなら，このカクテルについて語ることがそのまま哲学にならなくちゃいけない」といったという。

「サルトルは感動でほとんど顔面蒼白になった。それこそ，正確に，数年前から彼が望んでいたことだった。つまり，彼が触れている事物そのものについて語り，それが哲学になること」と，ボーヴォワールは伝えている。まさにこれこそ，『嘔吐』の世界ではないだろうか。ところでレーモン・アロンは，現在ソルボンヌの社会学の教授であり，ユダヤ人であるが，十年ほど前に来日し，そのときサルトルの『嘔吐』を非人間的作品だときめつけて非難した。また『知識人の阿片』L'Opium des Intellectuels という書物のなかでも，サルトルなど左翼的知識人のあり方を嘲笑した。思想的ならびに政治的立場の相違が，有能なこのふたりの知識人を対立に導いたのであるが，友情を越えて思想に生き，思想のためにはすべてを犠牲にするこのきびしさに驚かざるをえない。

もうひとつの逸話は，喜劇映画のマルクス兄弟に関したものである。サルトルとボーヴォワールのふたりは，貪欲な知識の吸収につとめ正規の勉強のほかに，映画を観，推理小説をむさぼり読んだ。マルクス兄弟は，彼らにいわせると，社会的因習や，言語や，組織的思考をこなごなにしたばかりでなく，「物」objets の持つ意味さえ粉砕し，更新させた。マルクス兄弟がお皿をおいしそうに喰べるとき，お皿は単なる道具ではないことを示したと考えた。ボーヴォワールは書いている。「かかる事実の確認は，サルトルをたいそう喜ばせた。彼は，ル・アーヴルの街のなかで，アントワーヌ・ロカンタンの眼を借りて，ズボン吊りや，市電の座席の，人心を不安に陥いれる変貌を観察した。破壊と詩。なんと見事なプログラムであったことか。あまりにも人間的な制服をはぎとられて，世界は，人の気を狂わせるような無秩序を発見した。」

市電の腰掛が死んだロバに思えてくる話や，たそがれの街なかを主人公がさまよい歩く場面などに，シュールレアリスムの影響があるのではないかと私は思っていたのだが，マルクス兄弟の映画とのつながりには思い及ばなかった。いずれにしてもボーヴォワールの語るふたつの逸話は，『嘔吐』を理解するに際して見逃しえないことではないかと思う。なお，『嘔吐』の背景であるブーヴィル Bouville には「泥の町」Boue+ville の意味があり，この小説を書くときサルトルが滞在していたル・アーヴルを彼が嫌っていたという推測をしていた人がいるが，ボーヴォワールの記述によればサルトルはこの町がかなり好きだったそうであり，したがって彼はブーヴィルを哀惜をこめて描いているといってもさしつかえないのではなかろうか。

『吐嘔』は以上のような経過を辿って出版されるに至った。ボーヴォワールは，これが完成されるまでに四年の歳月が掛ったと記しているが，作者の青春のすべてがここに凝結したというべく，あらゆる処女作に作者の未来がすべて萠芽状態のままふくまれているという定説を最もよく裏書きしている作品であるといえるであろう。

『嘔吐』は，刊行後すでに20数年の歳月を閲した。この小説の声価に関しては，さきほどのアロンの説は例外として，ほぼ共通の意見に到達してるように見える。それは，『嘔吐』が『異邦人』とならんで，現在につながる1930年代の文学のなかで古典というべき地位を占めているということである。『現代フランス文学史』の「失墜の文学」と題される章においてアンリ・クルアールは，つぎのように書いている。いささか長いが重要な意見であると思われるので以下に引用する。

「……第一次大戦後の混乱と，シュールレアリストの破壊行為，それからチボーデが〈飢えた犬の〉心理と命名した心理主義，そうしてポピュリスト作家の哀愁とセリーヌの下水溜文学。ところでいままた新しい絶望の文学が生まれた。

第二次世界大戦がヨーロッパの空にその脅威の翼をひろげたとき，暗雲に閉ざされたフランスの青年作家は，運命に対する挑戦，あるいはむしろ運命への嫌悪から，また人間であることをやめたいという感情から，作中人物として宿命の重さに打ちひしがれた人間をえらびはじめた。これらの作中人物は，受身の人間であり，創造という完全にして奇怪な不条理性に参加したい欲求の餌食になっていると思われた。彼らは人間の賤しき裏側や，悪に身を任せる傾向を明るみにだし，道徳上の〈ややっこしい規則〉を厄介払いした近代人から真理をはぎとろうと主張したのである。さらにこれに，下等な単語がいくつか添加されて，こうした小説は，〈暗黒小説〉le roman noir の方向を辿りはじめた。

このような異常さは，すでに周知の道が相集ったところから生まれた。サディズム，精神分析，アメリカの作家とともに舞いもどったピューリタニズムの伝統，チェコの作家カフカが，人間の外貌の下に描いた半ば潰された獣の匍匐，これらの道の十字路から，失墜の文学が生まれた。

今日，再版されようとする作品もないことはないが，これらの新傾向の文学については，すでに忘れられた作家や作品名を私は引用すまい。あるいはむしろ，ひとりの名前のみ引用しよう。なぜなら，たしかに彼こそ疑問の余地なき才能を示しているからであり，またこの小説的才能が哲学的著作に基づき，ある思想の流れに沿っているからであ

る。その名はジャン=ポール・サルトル。1938年の『嘔吐』と1939年の『壁』(Le Mur 短篇集)」

『嘔吐』の意義を高く評価する評論家は他にも多いが，ここでは，クロード=エドモンド・マニー，ジェルメーヌ・ブレー，コリン・ウィルソン，アラン・ロブグリエ，リュシアン・ゴールドマンなどの名前を挙げるにとどめよう。そして，ロブグリエが，『自然，ヒューマニズム，悲劇』Nature, Humanisme, Tragédie のなかで，「少くともここ二，三十年間におけるふたつの重要な作品が，世界との不吉な共犯関係のふたつの新しい形式，不条理なものと嘔気とをわれわれに示した」といっているように，多くの場合，『嘔吐』は『異邦人』と並んで論じられるようである。さて，コリン・ウィルソンは，ロカンタンとムルソーとをともにアウトサイダーとして規定した。たしかにこのふたりの主人公は，余計者であり，反社会的人間ではある。だが，彼らに共通点がある以上に，ふたりを相へだてるものが多いことも事実である。そしてそこにサルトルとカミュがえらんだ道のちがいを暗示するものがふくまれていると思うのである。

『嘔吐』は日記体であり，『異邦人』は手記のような形式をとる。つまりいずれも，一人称の物語である。一人称の物語であるということは，作者がそれぞれの主人公を客観的に描出しなくともさしつかえないという利点を持つ。たとえばバルザックが，彼の作中人物を微細にわたって描いたようには描かなくともすむ。『異邦人』のムルソーについて私たちは，彼がアルジェの下級サラリーマンである，ということ，最近衷った母以外には身寄りがなく，マリーという情人のほかには親しい友人もいないということぐらいしか知識を持ちあわせていない。だが，こうした知識の不足は，この小説を理解するためのさまたげとならないのである。不条理な人間としての強烈なイメージを提出しているということでは，あるいは『嘔吐』よりも印象が鮮明ではないかと思う。しかしそれ故に，この小説はレシ récit であって，ロマン roman とは呼べないであろう。その点『嘔吐』は，さりげなくではあるが，主人公ロカンタンの，年齢や容貌や職業や趣味や経歴など，彼を客観的に評価できうる条件を書きこんであるので，これをロマンと呼ぶことが可能であろうし，すでにここにサルトルとカミュの作家的資質の相違を認めることができようと思う。サルトルは，未完だが，波瀾万丈の長篇『自由への道』を書いた。しかしカミュは，『ペスト』La Peste を記録 chronique と呼び，『転落』La Chute をレシと呼ぶ。そして『異邦人』がそうであったように，晩年の『追放』L'Exil et le Royaume には，彼の私生活が色濃い影を落している。想像力の奔放さにかけて

は，いうまでもなくサルトルの方が上であろう。

二作品とも一人称小説ではありながら，多くの差違があるのであるが，一人称小説であることがどうしてもこの二作品にとっては必要な形式だったのである。なぜなら，ロカンタンにしろ，ムルソーにしろ，彼らがいつの日，いかなる時から不条理な人間，アウトサイダーになったのか，それを明瞭にすることは不可能であり，むしろあいまいにしておいた方が，これらの作品にレアリテを与えることになるからである。三人称小説ならばインサイダーからアウトサイダーに変化していったその経過を表現する必要があったであろうが，ある人間の覚書である以上，そうした説明は不要である。だがここでも，このふたりの作家の相違はあきらかだ。すでに，ナタリー・サロートが指摘したことではあるが，殺人を犯して独房にとらえられているムルソーが御用司祭の訪問をうける。そのとき彼は，はじめて内心の思いをぶちまけるのだ。「君はまさに自信満々の様子だ。しかしその信念のどれひとつをとっても，女の髪の生一本の重さにも値しない。君は死のような生き方をしているから，自分が生きているということにさえ自信がない。ぼくはといえば，両手はからっぽのようだ。しかしぼくは自信を持っている。自分について，すべてについて，君より強く，またぼくの人生について，来たるべきあの死について。……ぼくはかって正しかったし，いまもなお正しい。いつもぼくは正しいのだ。」

世の中のことすべてが，自分にはどうだっていいとうそぶくムルソーの内奥に，こうした決意が横たわっていることを知るのは意外でもある。自分の態度が正しいと主張できるのは，それだけ確固とした信念があったからであろうが，なぜ彼は裁判所においてその信念を述べ，己れの命を救おうとはしなかったのであろうか。アラビア人を殺したケースは，正当防禦とも解釈できるものであった。いやムルソーには，死ぬことによって自然と一体になるというひそかな願望があった模様である。なぜならこの小説の末尾で，宇宙と同化できることを幸福である，と述べているからだ。これは，論理的思考であるということはできない。カミュの初期の作品，たとえば『裏と表』 L'Envers et l'Endroit や『結婚』Les Noces において表明されている思想は，幸福の追求である。

したがってムルソーは，自然を讃美する地中海人の典型であって，論理性や明証性を具えている人間とはいい難い。その意味で彼は，作者であるカミュその人の一面を代表しているといえよう。

このムルソーが，いつの日から不条理な人生観を持つに至ったかを，カミュは説明し

ていないが，作中の文章から，それがほぼ大学を卒業した直後からであったらしいことが想像できる。しかし，もちろん卒業後の何月何日の何時からなどということはわからない。デカルトやパスカルの啓示のように，明確に意識はされなかったのである。ただムルソーは，彼の信念を御用司祭への怒りという感情の次元で表明しており，ロカンタンの公園での反芻におけるような論理的なものはなにもない。つまりムルソーはその生活と行動によってアウトサイダーであることを証明し，ロカンタンは，内面の冒険によって不条理の思想を分析する。これはそのまま作者それぞれの人生へのアプローチの仕方を象徴しているのではあるまいか。もちろんロカンタンとて，懐疑を知らぬあまりにも素朴な独学者や，自己満足のはなはだしい指導者に対する，はげしい嫌悪をぶちまけはする。だからロカンタンは，ムルソーの如くにわれを忘れることはないのだ。彼は人を殺さなければ，殴りもしない。ボタネ亭における独学者との会食で彼は憤然として席を立つが，彼は彼を見舞った内面的危機を冷静に記述し，第三者の眼で己れの行動を観察する。たとえば，「私もまた彼らのようであり人間であるとみんなは信じていた。ところが，私は彼らを欺いていた。一挙にして私は人間の外観を失った。そして彼らは，非常に人間的なこの部屋から後ずさりして逃げて行った一匹の蟹を見たのだ。いま，仮面を剝れた闖入者は逃亡した。」自己を蟹とし，人間の仮面を冠った闖入者と定義する，このロカンタンの態度は，自己の感情をそのままぶちまける高揚した，英雄気どりのムルソーとはまったく別のものであろう。ムルソーは必ずしも自己否定的ではない。むしろ彼は自己の正しさを確信している信念の人であろう。彼に比べるとロカンタンは，彼もまた自己の正当性を意識してはいるが，それは負の正当性である。「自分は結局，勝負に敗けた。同時に私は，だれもがつねに勝負に敗けるものであることを学んだ。ろくでなし salauds だけが勝つと思っている」とロカンタンは呟く。あるいは公園で，「意気地のない，疲労し，猥らで，食物を消化しながら陰気な考えを反芻しているこの私も余計な存在だった」という結論に辿りつく。自己を兵隊，蟹，余計者，敗北者，孤独者などと定義するロカンタンは，まったく意気の揚らぬ人物であるかにみえる。しかし，これらの消極的で否定的立場に自己を置くということは，世間の生活者，あえていえば salauds の眼のなかに絶対に入ってこないものを把握するための必要な措置であった。それだけではない。ロカンタンは，歴史の研究という一般に尊敬される仕事も，冒険家になるという自己催眠も，女友だちとの情事もいっさいを斥けて，嘔気に直面するのである。私たちが普通，思想というとき，それは社会的通念に支えられた，社会的伝達の

可能な一種の社会的概念であるということができる。だが，この社会的概念という幕の背後に埋没していて，尋常の手段ではとりだすことのできない深い真実というものがある。ロカンタンは，このような深い真実を嘔気という現象によって感得し，そしてそれをどこまでも追究したのではなかったか。彼は嘔気から身をかわさずに，嘔気と対決した。それは嘔気を乗り越えるための唯一の手段であったはずだ。『嘔吐』は否定的，消極的作品であるかにみえながら，事実は強烈な追究の書物であり，サルトルの新しい思想の展開をすでに予告していると私は思う。（1962. 8. 27）